

## 今年の貧酸素水塊の動向

伊勢湾・三河湾では、夏季を中心に底層に発達する貧酸素水塊（溶存酸素飽和度「DO」30%以下の水塊）による生物の生息・生残への影響が大きな問題となっています。今号では、今年の貧酸素水塊の動向についてまとめました。

伊勢湾では、6月上旬に貧酸素水塊が確認され、6月中旬に面積は最大(747km<sup>2</sup>)となりました。8月下旬には一時的に縮小しましたが、6月下旬から10月下旬まで約400～600km<sup>2</sup>の範囲で推移し11月上旬まで貧酸素水塊が確認されています（図1上段）。

三河湾では、6月中旬より貧酸素水塊が確認され、6月下旬に面積は最大(276 km<sup>2</sup>)となりました。その後は一時的に縮小し、8月中旬に67 km<sup>2</sup>となりましたが、再び拡大して9月中旬には252 km<sup>2</sup>となりました。9月下旬以降は水温降下により海水の上下混合が進み、10月下旬に貧酸素水塊は解消しました（図1下段）。

今年の特徴は二つあり、一つ目は、伊勢湾、三河湾ともに6月に貧酸素水塊の面積が最大となったことです。6月上中旬の降水量が多かったこと（名古屋地方気象台：上旬105.5mm（平年39.7mm）、中旬102.5mm（平年67.0mm））や6月中下旬の気温が高かったこと（名古屋地方気象台：中旬26.1℃（平年23.0℃）、下旬27.0℃（平年24.2℃））が、その原因の可能性として挙げられます。また、二つ目は8月に貧酸素水塊の一時的な縮小がみられたことです。これは、底層への外海水の流入の影響と考えられます。

当グループでは毎年、6月から10月まで調査毎に結果やその解析、今後の見込みをまとめ、「貧酸素情報」として発信していますので、ご活用ください。（欄外のAi-FISH 二次元バーコード参照）。

## 漁場環境研究部 漁場保全グループ

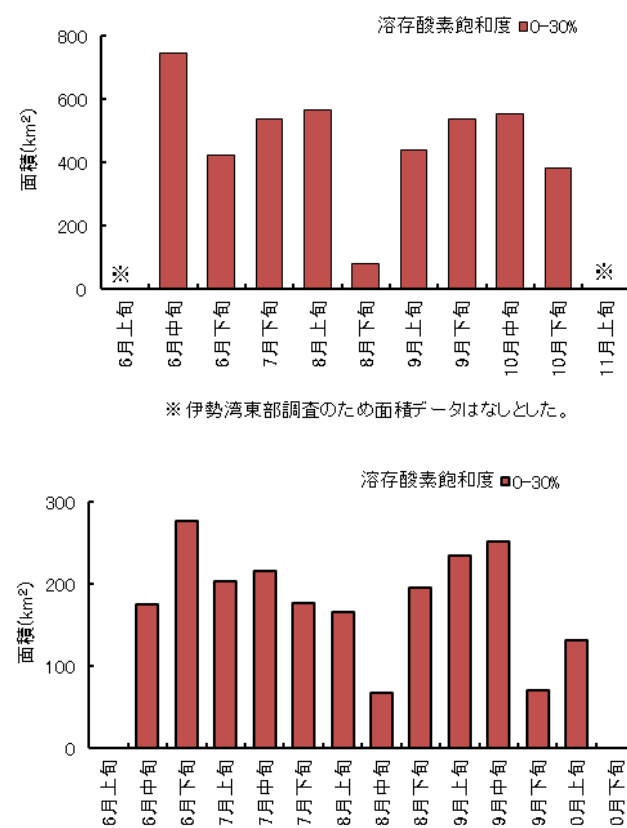


図1 貧酸素水塊の面積の推移（上：伊勢湾、下：三河湾）

## 衰退したサガラメ藻場の再生に取り組みます！

## 漁業生産研究所 栽培漁業グループ

サガラメは岩礁域に群落を形成するコンブ目の多年生の海藻で、アワビやサザエなどの磯根資源の餌料となるだけでなく、サガラメが繁茂するサガラメ藻場は、魚介類の稚魚などの餌場や生育の場となるうえに、大気中の二酸化炭素を吸収するブルーカーボンとしての機能も期待されています。

かつては、南知多町の内海地区から篠島・日間賀島地区にかけて広範囲にサガラメ藻場が形成されていましたが、平成10年頃から衰退が始まり、平成13年には内海地区等にわずかに残るのみとなりました。

そこで、平成10年度から水産試験場ではサガラメの調査や移植試験等を行い、平成22年度からの3年間で南知多町の中洲地先で移植による大規模なサガラメ藻場の再生試験に取り組みました。その結果、移植した翌年にはサガラメの繁茂が確認され、さらに平成30年度には移植した場所の周辺にもサガラメ藻場が広がっていることが確認されました（図2）。

しかし近年、漁業者からサガラメ藻場が再び衰退しているとの情報が寄せられたため、本年9月から10月にかけて南知多町の豊浜地区から篠島・日間賀島地区の海域で、潜水によるサガラメ藻場の調査を実施しました。その結果、サガラメの近縁であるカジメやホンダワラ類のトゲモクなどが藻場を形成していることを確認しましたが、以前、藻場を再生させた海域を含めてサガラメは全く確認されませんでした（図3）。

今後は、水温や流速などの環境調査によるサガラメ藻場の衰退した原因の解明と、水産試験場が保有する配偶体を活用して移植を行うサガラメ藻場再生試験に取り組んでいきます。



図2 平成22年度からの試験により再生した南知多町地先のサガラメ藻場（左：H23年度、右：H30年度）



図3 令和7年度に南知多町地先で確認された藻場（左：カジメ、右：トゲモク）

## ウナギの研究が農林水産技術会議会長賞を受賞しました！

## 企画情報部 企画普及グループ

漁業生産研究所栽培漁業グループ（旧所属：内水面漁業研究所内水面養殖グループ）の稲葉主任による「ウナギの雌化と食味に優れた大型雌ウナギ生産技術の確立」が令和7年度（第21回）「若手農林水産研究者表彰」（農林水産技術会議事務局主催）において、農林水産技術会議会長賞を受賞しました。都道府県の水産試験研究機関では初の受賞となります。

このたびの表彰を励みに、水産試験場ではこれからも現場の声を大切にしながら、水産業の発展につながる研究に取り組んでいきます。

業績の概要や若手農林水産研究者表彰については、右の二次元バーコードからご覧いただけます。

